２１．ウェスト教師についての資料若干（２）

機械系図書室　　滝沢正順
takizawa@mech.t.u-tokyo.ac.jp

１．

ウェスト Charles Dickinson West 1847－1908 は、明治 15 年にイギリスから来日し、工部大学校教授および（東京）帝国大学工科大学教師として、機械工学と造船学を教えたお雇い外国人である。

このウェストについて筆者が以前に、

・『御雇外国人教師ウェスト資料集』滝沢正順編・発行、1998 年 3 月
・滝沢正順「ウェストとウェスト文庫」、『図書館の窓』（東京大学附属図書館報）、第 38 巻 4 号、1999 年 7 月、48－50 頁
・滝沢正順「ウェスト教師についての資料若干」、東京大学工学部・工学系研究科技術発表会『技術報告』、第 15 回、2000 年 7 月、53－56 頁

で記したことについて、若干の追補と訂正を述べたい。

２．

『御雇外国人教師ウェスト資料集』で記したウェスト旧蔵ノートは全部で 19 冊であるが、それ以外に 3 冊のウェスト旧蔵ノートがあることが判明した。

上記資料集で記した種類でいえば、いずれも「その他」に属するものであり、東京大学機械系図書室で他のノートとともに所蔵されている。上記資料集での書き方で追記すると以下のとおりである。

追加①　<u>No.なし</u>　　Birkenhead　Feb 21　1874　の地名・日付あり。（造船所時代）。（小型）。
18、6 × 12、3 cm

追加②　No.14　　June 5　1867　の日付あり。（学生時代？）。
外表紙に "VOL.Ⅱ" とある。（黒、小型）。
17、5 × 11、5 cm

追加③　No.15　　（学生時代？）。
外表紙に "VOL.Ⅰ" とある。（濃いエビ茶色、小型）。
17、5 × 11、5 cm
最初の３ページは項目とページ数を記した目次になっている。

3.

また、上記資料集にまとめた東京大学機械系図書室所蔵ウェスト文庫の図書・製本雑誌について、訂正が２点ある。

W201 の単行本は、オモテの外表紙だけあって本体がないと記してあるが、その後、本体と裏の外表紙が見つかり、現在はオモテ外表紙と一緒に配架されている。

また製本雑誌のうち、英国機械学会の proceedings の１冊の「Riveted　joints」は、W 番号が不確実だったため、「W316?」と疑問符がつけてあるが、W316 番であることが確定できたので、疑問符は取ることができる。

4.

ウェスト賞は、ウェストを記念して東京（帝国）大学機械工学科の成績優秀な学生に授与された賞であるが、このウェスト賞の受賞者の回想をひとつ追補しておく。

回想の内容に新しい知見は多くないが、次のとおりである。

> ここで一つ自慢させてもらうと、大学を卒業するとき「ウエスト賞」をもらったことだ。明治の初めごろ、東大にウエストさんという外人教師がいた。この先生は日本で亡くなったが、その遺産を基金に機械科で優秀な成績を修めた人に賞を出すようになっていた。私たちのときは中川良一君（元日産自動車専務）も含めて七、八人ぐらいもらった。ウエストさんの像が構内にあり、卒業のとき、そこへみんなでお礼にいき、青山墓地にある墓にもお参りした。

この回想は豊田英二の自伝『決断・私の履歴書』の中のもので、東京帝大卒業は昭和 11

年である。

著者の豊田英二は大正２年生まれ。豊田佐吉の甥で、豊田喜一郎とは従兄弟になる。トヨタ自動車の社長・会長等をつとめた。

この自伝は、はじめ日本経済新聞の連載「私の履歴書」の一つとして、昭和 59 年 9 月 18 日から同年 10 月 15 日まで連載され、その後 1985 年に日本経済新聞社から単行本『決断・私の履歴書』として出版された。さらに 2000 年に同じ日本経済新聞社から同じ書名で文庫本（日経ビジネス人文庫）として出版され、英訳本も 1987 年に Kodansha International 社から出版されている。書名は『Toyota：fifty years in motion：an autobiology』である。

上記の引用は文庫本によっているが、同書には、東京帝大在学中の著者ら数人の学生が、次に記すウェスト銅像とともに写った写真が掲載されている。

5.

ウェストを記念してウェスト没後に東京帝国大学工科大学の前庭にもうけられたウェストの胸像は、2005 年現在も東京大学工学部構内に設置されている。

この銅像については、東京大学や東京大学工学部の構内を紹介する中に記されていることがある。

たとえば、木下直之「外国人教師たちの銅像」は、『淡青 TANSEI』（東京大学広報誌）第 13 号（2004 年 10 月）のなかに「キャンパス散歩」として掲載された文であるが、その中に、

> 外国人教師の銅像は、構内にあと二体ある。機械工学・造船学を教えたウェストと建築学を教えたコンドルの銅像が、工学部一号館の前庭に、左右に分かれ、まるで仁王像のように立っている。

と記され、胸像の写真も掲載されている。

同じ筆者の文で、木下直之・岸田省吾・大場秀章の共著『東京大学本郷キャンパス案内』（東京大学出版会、2005 年）のなかの「工学部」の章には、木下直之「技術者たちの銅像・近代日本を建設した人々」という文がある。

そこには、ウェストとコンドルの銅像について、写真とともに、

> ふたりが立つ向きは九十度ずれており、面と向かい合っているわけではない。それにもかかわらず、前庭の左右に、まるで一対の守護神のように鎮座している。

と記され、ウェストや銅像・台座の説明が記されている。

上記２つの文中の「仁王像」「一対の守護神」という語を妥当と感じるかどうかは、銅

像を見る人によって違うだろうと思われる。

また、『Ttime!（東京大学大学院工学系研究科・工学部広報誌）』第５号（2005 年２月）には、修士課程に在学中の大学院生２人による「銅像めぐり紀行」という文が掲載されていて、ウェスト銅像についても写真つきでふれられている。

> １号館の表玄関前の大銀杏を通り過ぎ、砂利道に入る。先輩が足を止めた。ふと見上げると、植木の中にひっそりと一体の銅像が建っている。チャールズ・ウェストだ。

とあって、「ウェスト像は胸から上しかない。そのせいか、今までの銅像に比べてやや地味な印象だ。」「不運なことに、彼はコンドル氏ら外国人教師が授与された工学博士号を貰えなかったのだと言う。報われない人である。」とも記されている。

この文中に「植木の中にひっそりと」とある。2005 年現在は樹木の生長もあって周辺の植物の繁茂が目立ち、そういう状態になっている。しかしウェスト銅像や周囲の明治時代や大正時代の写真を見ると、今とちがって像のほうがはっきりと目立っている。記念像としてつくられたのだから、像が目立つように設置されていたことは当然であるかもしれないが。ウェスト賞で引用した上記の豊田英二の自伝中の写真（昭和戦前期）でも、現在ほどには周辺の植物は目立たないようである。